
『ぼくら』の生きた時代

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ぼくら』の生きた時代

【コード】

N0137H

【作者名】

桂まゆ

【あらすじ】

女流作家Kの葬儀に参列する、新鋭作家「栗本薫」。故栗本薫先生に対する、ファンの思いを代弁してみました。

(前書き)

先に宣言しておきます。

ヤマなし、オチなし、意味……あるといいな。

ファンの方々、本当にすみません。でも、私もファンなんです。

女流作家Kの訃報を受けた時、ぼくはいつものように原稿用紙の前でうんうんうなっていた。

いまだき原稿用紙はないだろうって？ まあ、これがぼくのスタンスというものなんだ。

Wordの真っ白い画面を睨んでいようが、原稿用紙を睨んでいようが、思いつく時はぼんぼん思いつくもんだろっし、何も出てこない時は何があっても思い浮かばない。だからぼくとしては、長時間同じ状態が続くなら、少しでも地球に優しい方を選んでいる、ということにしておこう。

ぼくの名は、栗本薫。歳は三十をちょっと回った所で、職業はまあ、作家だ。

大学を卒業後、就職に失敗。数年間、おおよそ金にもならないような事ばかりしていたが、五年ほど前にぼくが書いたミステリー小説が「名探偵ホームズ賞」を受賞し、何とか作家という職業に就くことが出来た。

ただ、ぼくの書くミステリーは……これは、今はどうでもいいことだよ。暇があったら読んでみてね。「ぼくらの時代」シリーズ。けっこう面白いから。

K女史はデビュー当時からの知り合いで、かなりお世話になっている。

そんなK女史の突然の訃報を受け、ぼくは慌てて喪服をクリーニング店に取りに行く羽目になったのだ。

「薫。来てたんか」

受付をすませると、うしろからそんな声がかかってきた。

振り返ると、大学の頃からの悪友、加藤ヤスヒコが立っている。

そういえばヤスヒコは大学卒業後からずっと、雑誌の編集の仕事を

していたのだった。

東京に住んで長いはずなのに、相変わらずの関西弁だ。

ぼくはなんだか懐かしく、今では立派な社会人のヤスヒコを見る。ぼくと違い、ネクタイが似合う。

「信は？ あ、いや……」

ぼくとヤスヒコと来れば、かならずそこに居たもうひとりの名を口に出して、ぼくは首を振った。

石森信が、K女史の葬儀になど来る筈がないじゃないか。そもそも、あいつが日本に居るのかどうかだって解らない。あいつは、根っからの放浪人なんだから。

「信か、長いこと連絡ないな。でも、あいつのことや。便りが無いのが元気のしるしやで」

ヤスヒコが小さく肩をすくめたので、ぼくもそりゃそうだと納得した。

ぼくと信、ヤスヒコのつきあいのことも話すと長くなるので、機会があれば小説を読んでみてね。二回目だけど、けっこう面白いから。

葬儀はひっそりで行われ、ぼくは祭壇に向かって焼香をする。

ついこの間まで本当に元気で、連載小説のアニメ化の話なんかをしていた彼女の写真を前にすると、なんだか不思議な気分だ。

そういえばあの小説、結局未完になってしまったんだな。

これを書き終えるまでは死ねないって、何巻だったかのあとがきで宣言していたのにな。

きつと、まだまだ書き足りなかったのだろう。百巻で終わると宣言していたのに、終わらなかつた、あの長編小説。ファンも、楽しみにしていただろうにね。

知っていますか？ K先生。

あなたの小説のおかげで、命を救われたファンがいたんだよ。

「『グイン・サーガ』、最新刊読んでないでしょ？」という必死

の娘の娘の声に、意識不明の状態から生還した人が、実際に居たんですよ。

後で娘さんからその時の話を聞いて、その人は笑ったんだって。

「『グイン・サーガ』 完結するまでは死ねないね」って。

遺影の前で一礼をして、下がる。

K女史の無念も、奇跡の生還を果たしたその人の心痛も、今のぼくに図れるわけがなかった。

同じように焼香を終えたヤスヒコと、出棺を待っている時だった。

「栗本君に、確か……加藤君じゃないか」

近づいて来た男性が、きさくにぼくらに話しかけて来る。

喪服なんか来ているから、とっさに解らなかった。

山科警視。

あたまに白いものが増えてきているし、恰幅だつてかなり良くなっているが、相変わらずハンサムでりゆうとしてる。

「どうして君らが……まさか、いつもの得意技を發揮しているわけじゃあないだろうね、薫くん」

どうしてこの人は、ぼくを見ると毎度毎度、このひとことを言うのだろう。

ま、最初が悪かったんだけどね。

「やめてくださいよ、山科さん。ぼくらはただ、故人のご冥福を祈りに来ているだけですよ」

そうやそうやと、ヤスヒコも同意する。このあたり、ぼくらは山科警視と初めて会った頃とまったく変わっていないのだろう。

「ま、そういうことにしておこう。でも、今日中にこの葬儀に参列した者の中から人死にがでたら、まっさきに君をしょっぴくからな」

「また、そんな無茶をいう」

「いやいや、ここに伊集院大介や森力オルくんが揃えば、それこそ何が起こつても不思議はない」

と、山科さんは警察官にあるまじき、勝手なことを言っている。

「揃わないことを祈っていますよ」

ぼくは苦笑する。いや、故人の為には揃った方がいいのかな？

山科さんとぼくら。

そして名探偵伊集院大介や森カオル女史の関係については……言いたい事は、わかるよね？

山科さんと別れ、故人との最後の別れの瞬間、ぼくの耳にどこからかあの曲が聞こえて来たような気がした。

「天国への階段」。

ぼくら　ぼくとヤスヒコ、放浪中の石森信がロックバンド「ポールの一族」を組んでいた頃の、ナンバーだ。

どうか、安らかにお眠り下さい。

ぼくはもう一度、故人に祈った。

何となく、そのまま帰る気にもならなくて、ぼくは大学生の頃に通いつめていたライブハウスを尋ねてみる。だが、そこは全く別の店になっていた。時代の流れだ、仕方がない。

ぼくらもいつか、この世を去る時があるのかもしれない。

でも、ぼくらはかつてそんな時代に生きていたし、今もこの時代に生きている。

家に帰ると真っ白の原稿用紙がぼくを待っているし、勿論締め切りは待ってくれない。

でも、仕方がないだろ？

ぼくが今いるこの場所が、ぼくらの時代なのだから。

FIN

(後書き)

本当は、もっと先に書かなきゃいけないものあるでしょう？
解っていても、どうしても書かずに居られなかったので、書きまし
た。

故栗本薫先生のご冥福を、心からお祈り致します。

文体を真似して書いてみましたが、途中で挫折。

栗本先生は、こんなに句読点使わないでしょとか、改行しないでし
よとか……挙げ句に、「ここは、ひらがなか？ 漢字か？」悩んで
は小説を読みふけり……。

物語中に挙げられている作品は、栗本薫著、主人公栗本薫の「ぼく
らの時代」シリーズ及び、「猫目石」です。

初めて読んだ栗本作品がこれらでした。

その後、「伊集院大介シリーズ」や他のSF小説、そして未完の大
作「グイン・サーガ」に行き着いたのですが。

グインが葬儀には出られないと思いましたが、薫くんにしました。

(苦笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0137h/>

『ぼくら』の生きた時代

2010年11月10日10時50分発行